

田村 正雄の一代記

2026年

第一章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

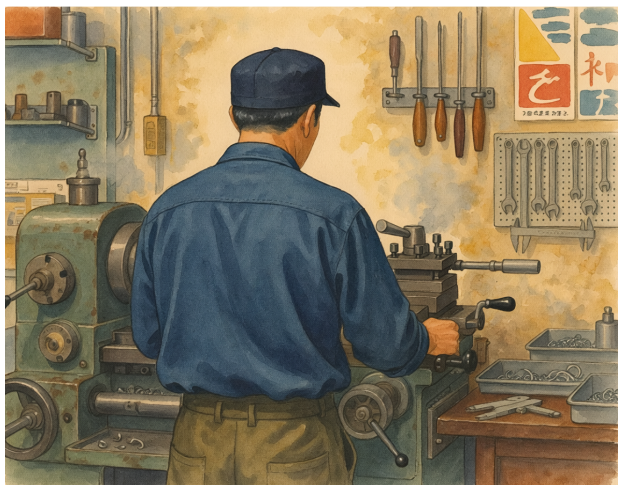
豊田というと今では自動車の町として知られているが、私が子どもの頃はまだ工場が増え始めた頃だった。田んぼがあちこちに残っており、春になるとカエルの声が夜通し聞こえた。父は自動車工場で働いており、機械油の匂いをさせて帰ってくる父の姿を見るのが、子どもながらに誇らしかった。

家は小さな平屋で、庭に柿の木が一本あった。秋になると柿がたわわに実り、それを採るのが毎年の楽しみだった。渋柿は干し柿にして軒下に吊るし、甘柿はそのまま食べた。市販のお菓子より、自分で採った柿の方がずっとうまかった。今の子どもたちにはわからない豊かさがそこにはあった。

三人兄弟の末っ子だった私は、口数が少なく、おとなしい子どもだった。しかし手先が器用で、図工の時間だけは自信があった。小学校で作ったラジオを先生に褒められた日は、帰り道に走った。ほめられることに慣れてい

なかったから、余計にうれしかった。

指物師の祖父が家具を作るのを小さい頃から見ている。祖父は「道具を大切にすれば、道具が仕事をしてくれる」と言った。その言葉の意味を、自分で機械を扱うようになってから理解した。道具を丁寧に扱うことが体に染み付いたのは、あの祖父の仕事場の空気のおかげだと思っている。



※実際の本には、ご本人やご家族の写真が入ります。

工場で機械と向き合う職人のイメージ

第二章 学生時代

(12～22歳ごろ)

中学では技術の授業が好きだった。ノコギリや釘の使い方を覚えるたびに、何かが自分の中に積み重なっていく感覚があった。ものを作ることへの手応えが、他の何よりも確かだった。成績は全体に平均的だったが、技術と図工だけは誰にも負けなかった。

進路を決める頃、工業高校への進学を選んだのは自然な流れだった。「ものを作る仕事がしたい」という気持ちは、その頃から揺るぎなかった。高校では旋盤の実習が特に印象に残っている。鉄の棒が刃に触れてゆっくりと削られていき、思い通りの形になっていく過程に心を奪われた。機械は嘘をつかない。正確にやれば正確な結果が出る。その潔さが好きだった。

部活は機械研究部で、放課後は工作室に残って仲間と部品を削り合った。失敗を繰り返しながら精度が上がっていく感覚が楽しかった。担当の先生が「田村は飲み込みが早い」と言ってくれた。それが自信になった。

卒業後に地元の自動車部品メーカーへの就職が決まった日、父は「技術は裏切らんぞ」と言った。言葉少ない父がめずらしく正面から私を見て言った一言だった。その言葉が、その後の長い職人人生の軸になった。

サンプル — 実際の本は、ご本人のお話からAIが文章を生成します

実際の本は全6章構成です

第1章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

第2章 学生時代

(12～22歳ごろ)

第3章 仕事・青年期

(20～40歳ごろ)

第4章 恋愛・結婚

第5章 子育て・家族

第6章 今の思い・家族へのメッセージ

(現在)

このサンプルは第1章・第2章のみ収録しています。